

聖刻群龍伝

龍睛の刻4

千葉 暁

Satoshi Chiba

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

口絵・挿画 三好載克

聖刻群龍伝

龍睛の刻4

龍の仔篇 鎮魂の章

プロローグ

第1話 龍の王

第2話 夢の終わり

エピソード

あとがき

346

319 93 17 5

プロローグ

北部の山地に築かれた城塞都市イシユカロン

かつてはイシユカークの政治の中心地、王都だった。幾度も戦乱が起こり、自衛の必要から攻められにくい要害の地に拠点を設けざるを得なかった。

しかし平和な時代を迎えると主要街道から遠く城壁に囲まれ発展の可能性がない都市構造が仇となり遷都されることになった。政庁機能だけでなく、城下町の主要商店や職能ギルドも王家に従って新王都に移転したため、数年後には過疎の都市と化した。

旧王都と呼ばれる現在、かつての目抜き通りも空き店舗が目立ち、行き交う人もまばらな、都市の活気などまるで感じられない町となっていた。

「ちっ、辛気くせえ町だぜ」

整った顔立ちの男が忌々しげに呟く。

大きな荷を背負っているが、行商人の類でないことは剣呑な雰囲気撒き散らしていることからして確実だ。客が寄りつくわけもない。

「酒でも飲まないとやってられねえぜ！」

男は紐が肩に食い込む荷を背負い直すと、視界に入った裏路地の酒場の看板に向かつて歩き始めた。

表通りにも飲食店は軒を連ねている。大幅に人口が減少したイシユカロンだが、食い物屋がない町というものは存在しない。 magari なりに王都だっただけに貴族を含めた上流階級を顧客とする店も数は少ないが残っている。

だが男はそうした店に見向きもしない。懐には高級店を貸し切りにできるほどの金がある。ただ肩が凝るような店が嫌いなだけだ。

路地に入った途端、空気が変わる。警備が手薄になるせいで一歩でも奥に入ると治安が悪くなる。現在都を治める王の代官は、体裁が調いさえすれば他はどうでもよいと考える、勤労意欲に乏しい役人だ。

都の暗部に踏み込む気など最初からなかった。

荷を背負った男は、闇から注がれる視線に気づく様子もなく、夕闇迫り薄暗くなつた路地を大股で進み、酒場の中に入った。

喧噪が男を出迎える。治安が悪いとされる場所であるが平然と飲み食いしているのだから誰も彼も堅気である。ろうはずがない。奥の卓では堂々と金を積んで（銅貨が主のようだ）賭事が行われているし、化粧が濃いあばずれ女を抱きながら杯を重ねる酔客もいる。男の口元が弛む。土地は遠えど子どももの時分から馴染んだ空気だった。

荷を下ろすと、壁面に酒樽や酒瓶が並ぶカウンタ―に向かい、店主と思しき男に、

「店で一番美味しい酒を出せ」

と、告げた。

店主はため息をつく。時々こういう客が舞い込んでくる。舐められまいと粋がつているのだから、大言とは裏腹に懐が寂しいと相場が決まっている。

裏通りに店を構えるとはいへ、地元の顔役も客としてくるだけに新王都でも高級とされる、杯一杯でも銀貨一枚を取るような酒も用意されていた。

「金を持つているのか？」と訊ねる前に、カウンタ―の上を金色の硬貨が滑ってくる。

交易用のゴルダ金貨だ。交換比率は金貨一対して銀貨一〇〇。普通の商店ではまず受け取りを拒否する。贖金を掴まされる虞があったし、それ以前に釣り銭を用意できない。

「ほ、本物か？」

店主が訊くと、男は無言で金袋を置く。開いた口から金貨や銀貨がぎつしり詰まった様子が覗けた。

中身にも驚かされたが、それ以上に男の目を見て、

「た、直ちに――」

急いでしゃがみ込み、鍵の掛かった扉に隠してある高級酒を取り出す。壁の棚には同じラベルが張られた瓶が並んでいるが、中身は格の落ちる酒と詰め替えてある。水増しと並ぶ酒販業の常套手段だが、

万が一にもペテンがばれたら命を奪いにくる無法者だと直感した。

「なかなかの酒を置いているじゃないか」

ひと口飲んで満足したのか、陽気な声で応えた。

「は、はい、連邦首都から仕入れた最高級品です。

旧帝国上級貴族が愛飲したとか。我がイシユカークの国王陛下も毎晩嗜んでいるそうです」

店主は調子に乗って蘊蓄を垂れるが、男は笑って、

「そりゃ盛りすぎだって。あいつは貧乏性だから

自分の愉しみに金は費やさないぜ」

目をパチクリする店主に向かつて、

「美味い酒には違いない。ふた瓶……いや、三瓶ほど貰っておくか」

「三っ?! 銀貨五〇枚を超えますが……」

思わず確かめるが、あの金貨の持ち主ならばこの金額で尻込みするはずもない。実際、男は別段気にした様子もなかった。反応は別の場所から上がる。

「——景気よさそうだなあ」

近くの卓に陣取っていた二人組が男の横に立っていた。

「儲け話があるなら俺らにも嚙ませて欲しいな」

酒臭い息を吐きながら絡んでくるが、ただの口実だ。カウンターの金を奪うことしか念頭にない。

「宝探しだ」

「へ?」

「地の底に潜り忘れ去られた宝を陽の下に晒すのが俺らの仕事だ。おまえらみたいに刃を突きつけ小銭を巻き上げるしか能がない手合いには務まらない」

酔客は怒りで顔をさらに赤くして殴りかかるが、顎を拳で打ち抜かれて後方に飛び、派手に卓や椅子を薙ぎ倒す。

仲間が金袋をかつ攫おうとするも、伸ばした手が届く前に細身の短剣で手の甲を突き刺された。

男は振り向きもせず酔客の手をカウンターに釘付けにした。いつ短剣を出したのかさえ誰の目にも止まらない手練の技だった。

「正面から挑まず、横からかっぱらうたあ、落ち目の都には三下しか残らないみたいだな」

あからさまな嘲弄に他の客が殺気立つ。やられたふたりが仲間というわけではなかったが、他所者に好き放題されて放置はできない。十数人からなる無頼の衆に囲まれながら男は太々しい態度を崩さない。むしろ喜悅の笑みを浮かべているくらいだ。

「このマウさまに喧嘩を売るってか？ 上等だ。穴倉暮らしが続いてむしゃくしゃしていたところだ」

酔客の手を縫い付けていた短剣を引き抜くと、口元に刃の部分運び、血を舌で舐め取る。囲んでいた荒くれ者が恐れを感じて後退る。

彼らは男の正体を知らない。旧帝都周辺で《血塗れマウ》の異名で恐れられた《ブル三兄弟》の末弟の噂を聞いていたら一目散に酒場から逃げ去ることを選択していたはずだ。

マウが酒場を出た時、すでにあたりは暗くなっていた。連邦首都や新王都と違って街灯はなく、月明かりと住宅や商店の窓から漏れる灯火だけが頼りだ。マウは夜空にかかる月の位置から店に入って半刻ほど経過したことを知る。

「拙いな……遊び過ぎたぜ」

苦い顔を見ると、荷を担ぎ直し、表通りに出て山側に向かつて緩やかに延びる坂道を走った。

目的地は王城だ。いや遷都後はただの城だ。しかも誰も住んでいない。このイシユカロン城が築かれたのは五世紀ほど前、南部系異民族（ナカーダ人の先祖）の侵入や地方領の独立などが続き国がもつとも荒れていた頃だ。防衛拠点として築城されたため居住性は劣悪、老朽化も進んでいる。《王弟の乱》で破壊された箇所は放置されたままだ。外郭部にある兵舎や厩舎、倉庫など一部が使われているだけで、城郭自体は閉鎖されていた。派遣されている代官にしても、城下にある貴族の邸宅だった空き家を

宿舎兼政務所としていた。利便性と費用の両面で王城を間借りするよりもずっと得だったのだ。

元王城だけに一般人が勝手に入り込むことは許されていない。遷都の際、王家代々の財宝（《蛮人王》に征服された際、ナカーダに接収されたが、八割方は取り戻している）や公文書の類は《水晶宮》に移されているが、かさばる上に年季が入った調度類はそのまま残されている。それでも王家の品ともなればそれなりの値で売却できるため、日に何度か城内を巡回の兵が回って侵入者を警戒している。

もつとも傭兵から護衛、暗殺、盗みまでありとあらゆる仕事で完璧と称せられた《プール三兄弟》にとっては障害にならない。綱一本あれば城壁を越えられるし、如何なる錠前も警報装置も突破できる。実際、このふた月ほどの間に何度となく、それも大荷物を抱えて出入りしているが存在を気取られずらしい。誰も城郭に寄りつかないことも発覚しない理由だろう。

鼻歌交じりに庭を突っ切り、主城郭より奥まった場所にある瓦礫の山に向かう。遷都前は離宮と呼ばれていた建物で《蛮人王》征服の折に病床にあった先代王アグリテイと共に焼失している。

自分の国を蹂躪される光景を見たくなかったが故の焼身自殺と伝わっているが、真実は違う。離宮の地下に眠っている秘密を隠すためだった。

「——とか兄貴は言ってるが、実際はどうだったんだろうな。後妻の色香に参ってお家騒動の原因を作った愚王なんだろう」

そう独語すると、瓦礫の隙間に潜り込み、地下へと下りていく。彼らがこの地にきておよそ二カ月が過ぎていた。地下へと続く安全な通路は構築済みだ。巡回兵が通りかかっても見つかからないよう入り口の偽装も完璧だ。人払いの結果すらかかっている。並の山師ができる業ではなかった。

縦穴の外周に設けられた階段を下っていく。角灯の弱々しい光では底まで届かない。二〇年以上前、

デユマシオンが仲間ふたりを連れて冒険に赴いた場所だが、マウはそんなことなど知らないし、どうでもいいことだ。下りきった場所に鎮座していた初代《ソレイヤード》はとうの昔に持ち出されているのだから。

そこでマウは意地の悪そうな笑みを浮かべる。

「あいつが必死になつて探し求めたお宝が、足元に隠されていたと知つたらどんな面見せるかな」

かつて《王者の操兵》の仮面と《歩の操兵》の機体が安置されていた場所の床石が一部剥がされ、さらに下へと通じる穴ができていた。

「真のお宝を守るため、手前にちよこつと価値のある品を置いておくつてのは山師の常識なんだが……素人のガキンチョにはわかるはずもないか」

そう言い残すとマウは穴の中に下りていった。

「買い出し如きで、いつまで油を売つていやがる！」

穴の奥でマウを出迎えたのは怒声だった。

「いいだろ、少しぐらい息抜きさせてもらつても。ガキじゃねえんだからよ」

髪はボサボサ、無精髭で顔の半分を覆つた中年男が呆れた表情で、

「……三〇過ぎたクセに、叱られるとすぐふて腐れるところは出逢つた頃のまんまだな」

「ルーランの兄貴は爺むさくなつたぜ。女どもに教授とか呼ばれて鼻の下伸ばしていたせいだな」

「何だと！」

ルーランが殴りかかる前に、横合いから襲いかかる大きな拳が命中してマウが吹っ飛ぶ。

「……兄者に無礼を働く。許さない」

暗がりの中から顕れた巨漢が無表情に告げる。

マウは殴られた側の頬を押さえて立ち上がる。

「リ、リロイ……どこから湧いて出やがった？」

目を向けると、木箱を積み重ねた荷の奥に寢床が拵えてあつた。今まで寝ていたらしい。

「兄貴の悪口で目を覚ましたのか？ まったく忠犬

つぷりは変わらないな」

「弟が兄に従う。当然」

「だったら、ちつとは弟を勞いたれってんだ！」

マウが涙目で噛みつくが、リロイは眉まゆひとつ動かさず、弟分を冷たい目で見下ろす。

「マウ、兄者に反抗的。使いも満足にこなせない。

不出来な弟を矯正きよせいする。次兄の役目——」

そう言つて拳を固めて振り上げるが——

「もういい」

長兄のひと言がリロイを止める。

「殴つた程度でそいつの性根は改まらんからな」

次兄が手を下ろすと、末弟は見るからに安堵あんどの表情に変わる。荒事には馴れているが、身のこなしが速い上に目もいたため、酒場での乱闘のように標的を一方的に切り刻むばかりだったせいで、痛みにはあまり耐性がない。もつとも次兄の巨腕で殴られたなら、多少耐性があるうとなかうと関係なく体が壊れるのだが——

ルーランがくんと匂かいを嗅ぐしぐさをした後、マウに剣呑な目を向ける。

「——誰と揉もめた？」

《血塗れ》の異名にそぐわず、返り血を避けて蹂躪したのだが、匂いではれたようだ。

マウは観念して白状する。

「大丈夫だって。兵隊や堅気の衆には手を出すどころか怪あやしまれもしてねえ。土地の、ちつとばっか息巻いている連中を軽く撫なでてやっただけさ」

ひとりも殺さなかつたのは官憲の介入を招き、手配書でも出回ると食料の買い出しが面倒になるからだ。生かしておけば報復に出る可能性もあるが、そのために実力の差を見せつけ、念入りに脅おどしを入れておいた。

ルーランが話を聞いて嘆息たんそくをつく。

「途中までは褒ほめてもいい。だが名乗りは余計だったな」

「何でだよ？　こんなど田舎いなかだぜ、俺らの名前だつ

て知れちゃいねえよ」

「山師の情報網が問者匠合並だつて忘れたか。わしらの名が届けば目の色を変えて集まつてくる。まあ、一〇年以上こつちの仕事から遠ざかつているから、そう神経質にならなくてもいいかも知れないが」

ルーランは渋い顔で考え込む。その様子を見てさすがのマウも申し訳なさそうにしていた。長兄がアマルーナで長らく居座つていたのも、ローエン・ユードイスとの約束を守り、遺児ルイスに《八極流》を伝授するという目的もあったが、古シユルティ文明の遺産が眠る《王の墓》発見という山師の世界では近來希に見る偉業からほとほりを冷ますという意味合いが強かつたためだ。

「食料は何日分仕入れてきた？」

長兄の問いにマウは体の大きい次兄をちらりと見て、

「ひとり大食いがあるからな。三日も怪しいんじゃないか」

ルーランが黙考の末に決断を下す。

「よし！ 目処をつけるまで全員籠るぞ。マウ、おまえも作業に加われ」

「げっ、どうかしたのかよ。俺が入ろうが入るまいが、一日二日で終わる仕事かつて！」

そう叫んでマウは光が差す側に顔を向ける。

そこは地下に拡がる巨大な駐機場ともいえる場所だった。身の丈二リート（八メートル）近い総身に甲冑を纏つた巨人がずらりと並んでいる。

彼らは同じ光景を数十年前に見ている。デュマシオンの依頼で従つた、アルタイア海に浮かぶ奇岩島の地下で発見した《王の墓》だ。安置されていた機体も同一のもの。ただし今は甲冑が黒真珠のような光沢を帯びた色で統一されている点が異なる。

「状態はいいようだが、一〇〇〇年以上凍結処理されていた機体だけ。装甲下の詰め物剝がして、血液の再充填、おまけに仮面の封印解除——工呪会の協力があつてもスイナーグ一騎にひと月上かかっ

たことを忘れたか？ 俺らだけなら何年、うんにゃ何十年かかることか！」

だがルーランは不敵な笑みを浮かべて、

「前と同じ轍は踏まん。そもそも人力でやろうなどとは最初から考えていない。ここの施設は《王の墓》より数段上だ。倉庫と思しき区画に蓄積された夥しい量の交換部品を見たな。そして用途不明の機械が並ぶ区画があっただろう。恐らく《海龍の巢》にあった全自動の修理装置と同じ仕組みの代物だ」

七年前の《メツシナ沖海戦》で海の龍操兵は全機沈んで龍騎士の拠点は放棄されている。ルーランは極秘裏に跡地を調査し、古代文明の技術を一部解明していた。むろん世間に発表するつもりは毛頭ない。マウは目を見開いたまま、

「この機械を使って全部の操兵を蘇らせようってか？」

「二カ月も費やして仕組みや操作を調べていたのはそのためだ。主動力さえ復旧すればまとめて復活で

きるとわしは睨んでいる」

自信ありげ、というより、しくじることなどまるで考えていない長兄の態度にマウは呆れる。

ルーランは凄腕の山師だ。身内鬩廝とは無関係にそう信じられる。どれほどの墓や神殿跡を探し当て古操兵を発見してきたか。この世界で最大の調査能力を誇る工呪会の下部組織《巨人の足跡》すら何度となく出し抜いている。

公にはデユマシオンが発見したことになっている（奇岩島の遺跡の存在はずっと昔から存在が疑われていたが、管理していた練法師匠合《至高の宝珠》によって立ち入りが禁止されていた）シユルティ古操兵群にしても、《三兄弟》が工呪会との橋渡しと技術協力を申し出なければ使える状態になるまで年単位の期間を要し、祖国奪還に間に合わなかったかもしれない。その意味でルーランが西部域の歴史に与えてきた影響は大きいのだろう。

「兄者ができると言うのなら間違いない」

次兄リロイの返事は決まりきっていた。血の繋つながりのないルーランを兄と慕したい、昔から行動方針を一任している。無口であるし、表情に乏しく、ひと一倍体が大きいため荒事専門に見えるが、古代文明の知識、特に古操兵については長兄に匹敵ひつてきすることは兄弟の間でしか知られていない。

「あー、わかつたよ。手伝えばいいんだろ。だけど、俺の分の飯はしっかり貰うからな」

「問題ない。わしはこいつがあれば充分だ」

そう言つてルーランはマウが運び込んだきた荷物から酒瓶を取り出す。見つけにくい奥にしまつておいたというのに。只ただでさえ鼻ながいい上に、酒に關する勘かんはその上をいく。

「あ、兄貴かい、俺の分は勘弁してくれ」

三本とも手にする長兄を見てマウは情けない声を出して取りすが纏るる。

「わしが弟の取り分まで巻き上げるほど欲深か？」

「……………」

言葉にしないが、まったく信用してはいないという表情だ。確かに仕事の分け前は弟分だからと低くすることはないが、酒に關する限り抑制というものが皆無なだった。實際ルーランは酒瓶を抱えたまま手放そうとしない。日頃から「命の水」と呼んでるように酒が入った時は馬力が増す。三日三晩の徹夜くらい平気でこなす。

いい年なんだから酒量が落ちてもいいだろうに、と内心で愚痴ぐちる。もし聞かれたら半殺しの目に遭あうことは必至めいしだった。

マウは当分禁酒を覚悟するが、何もかも大人しく従したがうつもりはなかつた。

「なあ、兄貴……本当にいいのか？」

「何のことだ？」

ルーランは酒瓶を自分の荷に移して聞き返す。次兄のリロイも寢床を片づける手を止めてマウを見る。「この依頼を本当にやり遂とげていいのか？ そりゃ報酬はすげーさ。《王の墓》の時とは比較にならねえ。

だが——」

「怖じ気づいたのか」

長兄の擲揄にカツとなりながらもマウは、

「ああブルっているさ！ デュマシオンに敵対するのはどうでもいい。あいつ、偉くなつて調子こいてるからな。ここにある古操兵をぶつけて痛い目に遭わせるのもいいだろうさ。だけど、それだけで済むのか？ とんでもねえ災厄の引き金になる気がして仕方がねえ」

自分でも支離滅裂なことを言っていることは自覚していた。シユルティ古操兵八八騎、それも使い倒して性能が落ちた機体ではない。紛れもなく西方どころか大陸屈指の戦力だろう。しかし乗り手がいない。《王》から遠隔操作が可能な《歩》といえど生贄となる人間を乗せる必要があつた。つまり現時点では宝の持ち腐れになりかねない。それでも全機の再稼働を急ぐ理由は何なのか？ 雇い主からの説明はなかつた。

「——どうでもいいことだ」

長兄であり、指揮官であるルーランはこともなげに応えた。

「《龍の王》がヤバイ奴だつてことはわかっている。生まれ変わつても世界の支配を望む偏執狂だ。わしなど想像もできない悪巧みを抱えているんだろうな。だが、あえて言おう——『それがどうした』と」
マウが呆気に取られる。リロイは無表情で聞いているだけだ。

「わしらは何だ？ デュマシオンの手下か？ 違うだろう。ただの山師だ。無法者と言い換えてもいい。世の中がどうなるうと知つたことか。乱世に逆戻りしようが、暴君が大陸全土を征服しようが何も困りはしない。かえつて荒れているほうが住みやすいくらいだ」

これまで常識に囚われず自由気ままに生きてきたルーランらしい科白だ。が、それでもマウには長兄の言葉に違和感を覚えずにいられなかつた。ローエ

ンの遺児に剣を仕込んだのは酔狂で片づけられるとしても、デュマシオンの誘いに応じて何年も王立大学に引き籠っていたのは何故か？ 長兄が《王の墓》を見つけて以来何かを待っていたことは薄々察している。《龍の王》から依頼を受けるや、今までの怠惰な暮らしが嘘だったように働き始めたのには理由があるはずだ。

「あ、兄貴——」

言い募ろうとしたマウの肩が強い力で掴まれる。リロイだった。制止を受けてマウは察する。ルーランが何かを企んでいる、と。現に異を唱えたにもかかわらず長兄の顔に怒りの色はない。普段なら問答無用で殴り飛ばされるところだ。それどころか口元に笑みさえ浮かんでいる。

（そっか、誰かがこの遣り取りを聞いていることを前提とした芝居なんだな——）

納得したマウは、大仰に肩を竦めて見せる。

「あーあ、兄貴が決めたことなら従うしかねえな」

ルーランは「大根役者め」とでも言いたげな苦笑を浮かべるが、問題ないだろう、と踏んでいた。監視しているのが間者であれば看破されていただろうが——

ちらりと視線を向けた先、駐機場のほぼ中央に、他とは別格の台座に据えられた操兵がある。雇い主が最初に再稼働の作業を始めるよう指定してきた機体だ。すぐに理由がわかる。《王者の操兵》——デュマシオンの愛機《ソレイヤード二世》の完全同型機だ。ただし機体色が他と同様に黒い。

仮面を装着し、再起動して以来、操手が乗っていないにもかかわらず心肺器が停まることなく鼓動を打ち続けている。

そして仮面の眼窩に相当する隙間から覗く《眼》がずっと《三兄弟》を見ていたことにルーランは気づいていた。

第1話

龍の王

西方曆1849年8月
帝国曆244年8月



イーグル・サイガ・インヴォルグ

1

泣き声が聞こえた。

ああ、またなの？

あたし——アーシエラ・アレイ・ベール——は、ため息をつくど幼馴染の元に向かつて庭を駆けた。

きつと城の連中に苛められたんだわ。

勝てないのだから逃げればいいのに、あいつときたら負けず嫌いが災いしていつも痛い目を見る。齒向かう気概があるのなら相手の鼻っ柱に頭突きのひとつもかましてやれ、と喚けているのだが、毎度バカ正直に正面から向かつていくだけ。不意打ちを卑怯とでも思っているのかしら？ 年下相手に多勢で仕掛けてきた時点で向こうのほうが卑怯卑劣なのに。

声は、細い枝が無数に地面近くまで垂れ下がった中低木から聞こえた。名をユキヤナギっていう。冬

に白い花をびっしりつけることかららしいけど……あれ？ 今って何月だっけ？

まあ、いつだっでもいいか。肝心なのはどこのどいつに苛められたか、よ。二度とちよつかいかけてこないよう、首根っこを締めあげてやるわ！

そう言えば、過激な報復を繰り返したせいで、城の連中は裏であたしのことを「第二公子の番犬」なんて仇名をつけているのよね。

先に慰めておくか。あいつの耳に入る前に女らしいとところも見せておかないとね。

あたしは無理くり笑顔を作ると、枝のカーテンを払って泣いている幼馴染の元に——

あれ？

寝台に突っ伏している男がいた。誰こいつ？

身なりから身分が高い人だっけわかる。顔は見えないけど三〇くらい？ もう少し上か。

「うぐつ……う……ううつ」

この人——ディアだ。

デユマシオン・イスカ・コーバック——イシユカ
 ーク国の国王にして、西方西部域の七割を事実上支配している権力者——見た目は偉そうに見えないけどね。泣いているし。

嗚咽を聞いてすぐにわかった。あたしの愛する厄介者はいつもし声を抑えて泣く。出逢った頃からだ。親兄弟の死を聞かされた時も、帝都を追い出された恋人と引き剥がされた時も、乳兄弟をその手にかけてた時も、大事な部下を亡くした時も、人前で声を上げて泣いたことがない。落ち込んでいる姿は平気で誰にでも見せるくせに。矜持の在処がよくわからない。

ねえ、どうしたの？ 誰に苛められたのか教えてよ。あたしが仕返ししてあげるからさ。

あー、ダメね。これじゃ番犬と呼ばれていたガキの頃と一緒にだわ。大人の女らしく、柔らかな胸に顔を埋めさせて——って、あたし、いつからディアと触れ合うのやめたんだっけ？

皇女が嫁いできたから？

練法師に戻った日から？

ディアとひとつになった時——ああ、そうよ。《王弟の乱》の前夜、ひどく気落ちしてたあいつを見てたら胸が苦しくなつて……。

そう、わたしは過ちを犯した。未婚の男女が臥所を共にするとはふしだらだ——なんてペガーナの坊主が取り澄ました面で語る説教なんか知ったことじゃない。闇の世界に身を投じた無法者に世俗のしきりに縛られる道理があるもんか！

問題は子ができてしまったこと。

肝が潰れるほど驚いたわ。当時のわたしは練法師だった。クズ聖刻石で手品紛いの術を使う程度ならいざ知らず、仮面を被って高位の術を使うには聖刻に耐性を持つ肉体に改造する必要があった。俗人には想像も及ばない訓練に薬物投与、頭蓋骨を割って脳に細工を施すこともある。どれも拷問に等しい。最後のなど、成功しても長い間後遺症に苛まれ、

失敗すればよくても廢人なのだから。

わたしはその試練を二度も潜り抜けた。一〇〇〇年を超える練法師匠合《至高の宝珠》の歴史の中でもわたしぐらいのものと聞いている。誇る気にはとてもなれないけど。

何故って？ 思い出すと今でも怖気が走るほどの苦しみだったからよ。特に二度目はまったくの不測の事態だった。練法師の力を喪失することはままあるが、逆はあり得ない。その不可逆的現象が生じた結果、本来何年もかけて慎重に調製されるべき肉体改造を一挙に行つた。間者として鍛え上げた肉体はひと晩で骨と皮ばかりになり、仮面と長衣で隠さなければ人前に出られないほど変わり果てた。まあ、何ヵ月もかかって人並の体つきに戻つたけど、それも見かけだけで月のものは消えたし、情感も薄れた。最初に練法師になつた時は、時間をかけて調製を受けたせいで気にも止めなかつたけど、急激な変化のせいで違いが実感できた。ああ、女でなくなるばかりか

りか、人以外のものになつたのだ、と。

普通の人間であるディアと人外の自分が生殖行為に及んだところで形ばかりのものになる。そう思い込んでいた（女練法師の妊娠率は相手と同じ術者であつても人為的に処置されない限り極度に低い）が、気づくとわたしの腹には新しい命が息づいていた。奇跡——と妊娠が発覚した時はそう思いもした。

世界すべてを敵に回しても産んでやる！ と母性本能に衝き動かされて誓いもした。

出産を終え、母親の責務から解き放たれた時、ふと我に返つた。どうしてこの子を産んだのか？ いえ、それ以前にディアと何故交わつたのか、と。

同情？ もちろんそれはあつた。わたしはディアを愛している。それこそこの世の誰よりも。でもそれが世間で言うところの男女の愛かと問われれば首を傾げるだろう。幼い頃からディアは守るべき存在であり、分不相応の野心を抱き、危なっかしいことを続けるあいつを見ていられなくて手を貸している

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。